

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04610

研究課題名(和文) 日本式高専のモンゴル・マレーシアへの輸出と定着に関する研究

研究課題名(英文) The Study on Transplant of Japanese KOSEN to Overseas Education Systems

研究代表者

竹熊 尚夫 (TAKEKUMA, Hisao)

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：10264003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は日本式高専の特徴と特殊性を把握し、海外輸出においてはモンゴル、マレーシアでの高専の設立と留学準備教育、教育研究交流という海外展開を、日本国内と海外での現地調査、質問紙調査により明らかにした。マレーシアとモンゴルの留学予備教育機関では教育方式が異なるが、調査では当該国から我が国への留学生の流れにおいて、準備教育が効果的に機能している点と現地高専では当該国の文化的、教育環境的な課題によって日本高専の特徴(ものづくり、協働性、厳密な学習教育態度等)が部分的に受容されているが、実験演習等では完全導入が困難であることを明らかにした。この他時間厳守や先輩後輩関係等が受入困難と見なされていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、高専と呼ばれる、日本特有の学校教育機関の海外への教育移植を取り上げる。受け入れ国において教育・社会の状況(就学率等、社会経済的状況、教育政策理念、教育観・学校観、学校制度全般等々)の中で、制度の導入(法律の制定、制度の連結・結合・融合)の程度が検証され、定着プロセスでは社会認知、教員、生徒における受容の程度、変容が検証される。同時に、高専独自の教育目標、理念、組織、人材が導入後にどのように咀嚼され現地化し、受容されていくのか検証を行う。加えて、グローバルな実技実践能力や知識理論がローカルと如何に対峙するかという、教育の国際的協力に関わるコンフリクトの検証へと展開する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify and understand the characteristics of Japanese-style technical colleges "KOSEN" by field survey and questionnaire to foreign students. To grasp the situation of overseas exports, we make field survey on the establishment of technical colleges (or overseas-study preparation education) in Mongolia and Malaysia, and the development of overseas exchanges of education and research. Although the educational system and status are different between the preparatory educational institutions in both countries, the survey shows that such education functions effectively to acculturation of foreign students who influenced by the cultural and educational environment of each country. We found that the characteristics of KOSEN (craftsmanship, collaboration, strict learning-education attitudes, etc.) were partially accepted, some experimental exercises curriculum are modified, and punctuality or seniors-junior relationship were difficult to accept by them.

研究分野：比較教育学

キーワード：比較教育学 教育移植 高専 日本式教育 海外輸出 国際交流 モンゴル マレーシア

## 1. 研究開始当初の背景

高専は元々高度経済成長期に大卒のプロフェッショナルエンジニアと中卒・高卒のテクニシャン(技術者)の間に立つテクノロジストを養成すべく設立されたため、実験や実習など「技術を持っている」ことが重視されている。また、高専は高大接続やアクティブラーニングが求められている現況において、そのモデルともなり得るユニークな教育が実践されている所である。中卒生を受け入れているにもかかわらず、高等教育機関とみなされており、専門教育や一般教育でも理数系を担当する教員は博士、文化系科目を担当する教員でもほぼ修士以上の学歴を有している。また、学習指導要領に縛られないことから徐々にではあるが、1年次より専門教育が開始されるだけでなく、科目によっては3年生で大学1年生レベルの教育が行われるなど専門性が活かされた独自の教育が展開されている。

既に実施されている海外での高専準備教育と日本への高専留学の実態と問題点を明らかにすることで、よりスムーズな高専の輸出、そして両国から日本への留学という横の移動、進学や編入という縦の移動の仕組みを改善することができる。現在、大学教育の中への職業教育の組込や職業教育課程と資格の再編は多くの先進諸国でも実施されているが、技術者・技術教育の地位、価値、評価は日本独自の技術観、技術教育観から多くを学び取る中で再評価されることが必要である一方、日本側は技術教育にとどまらない高度職業人材へとつながるルートを中等教育段階に提供することで新たな発展可能性を示しつつある。また、海外における高専の移植を分析する本課題研究はアカデミック教育と職業教育の融合した日本式教育の輸出という形態をとり、制度の輸出は途上国への教育協力の一つの方策でもあり、日本国内における高専の再評価につながるばかりでなく、将来的には他の途上国への海外展開の拡大を促進する効果も期待される。

## 2. 研究の目的

本課題研究は、モンゴルとマレーシアにおいて、日本の高等専門学校が導入されている状況を踏まえ、日本式の学校制度と教育形態が当該国においていかなる背景で導入、展開されているのか、そしてそれぞれの国、社会、教育の状況に応じて日本の学校が認知され、教育文化がどのように定着しているのかを明らかにする研究である。研究期間は3年間とし、現地の大学の研究協力者、教員、学生へのアンケート調査も実施し、日本式教育の価値観への理解度や変容、教師生徒関係、教授内容、学習方式等からモンゴル、マレーシアと日本の相違及び、導入の定着過程、定着状況を明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

まず、制度的な定着に関わる、法的根拠(教育法)教育・資格認定(入学と課程認定、資格の種類等々)教員、カリキュラム・テキスト、卒業者の進路状況などについて独立法人国立高等専門学校機構の協力を得て国内調査を踏まえて、モンゴル調査の準備を行うこととした。

次に、アンケート調査を現地の高専課程の学生と教員に実施すると共に、マレーシア、モンゴルの在日留学生への調査(郵送法)を本格実施することで、現地の学校での日本の高専教育・学習文化の理解と定着度について明らかにすることに取り組んだ。

本研究では移植内容に関わるコンテキストを内容の移植の進行過程に沿って区分した。導入前のコンテキストとして借用に基づく政策(理念)決定と借用の第一段階である制度的受容に関わる、法的根拠(教育法)教育・資格認定(入学と課程認定、資格の種類等々)教員、カリキュラム・テキスト、卒業者の進路状況などに加えて国、社会における社会的認知と広報政策について明らかにし、外的制度の各要素の高専制度との整合性を確認し接合の可能性が考察する。

現地調査においては、移植される価値、コンテンツ、システムに教育移植の効果に関わる教育実践の側面からは高専教育を提供する現地教員、日本人教員、学生の価値観、態度、修得技能の面から日本の高専式教育・学習文化の理解と定着度、技術教育観や学力観などを含む文化・構造変容について明らかにすることである。個人の価値観の変容では教育成果、学習成果のなかに、規律意識、愛校心、社会観、人生観の変化や、学生に浸透した高専風土(技術教育の重視、実践重視、高専独自の勤勉性・協調性・忍耐力等)の定着度を明らかにする。

また、社会の変容では職業観、技術観、大学観への影響、進学意識(リスクとメリット)等の変化が予想される。進学率の変動等から社会的認知度や教育制度(進学率・学校種別等)における高専の接合も重要な要素である。この他、高専内部における、現地の高専課程の学生と教員に実施すると共に、マレーシア、モンゴルの在日留学生の価値観、現地の学校での日本の高専教育・学習文化の理解と定着度についても分析を行う。

これらを日本式高専教育の輸出の有効性と定着・変容に関する事例研究としてマレーシアの事例とモンゴルの事例とで比較検討し、制度、内容、価値意識面の結果を対照させ、両国の比較をとおして、日本式高専の教育移植と社会変容のプロセスを検証しようと試みる。

## 4. 研究成果

### (1) 国内高専調査結果

高専への訪問調査及び校長をはじめ、科目・指導教員、国際交流担当教員、留学生へのインタビュー調査において、高専の制度上の特性として明らかになったところは以下通りである。

高専から大学への編入後、あるいは大学院での研究において、高専卒業生は非常に高いパフォーマンスを発揮できる。一般に、高校普通科から大学工学部に進学しても、1年あるいは1年半

は教養教育が主であり、本格的に専門教育、ましてや実験を伴う教育を受講するのは大体2年以降ということになる。従って、高校1年段階から装置に触れている高専生とは大きな開きがあるといえよう。その結果、即戦力ともなり得る高専卒業生を求める大学が増え、推薦枠が拡大しつつある。企業の求人にしても高専生は非常に評判が良い。これも実践重視の教育の成果のひとつといえる。再試は勿論、留年を厭わない厳しい教育環境による「質保証」、また卒業生の活躍等も企業が高専生を求めるもう一つの要因といえよう。

一方、インタビューでは、一般教育と専門教育との関係の難しさが明らかになった。副校長先生は、数学を教えるとき、その後の工業のこの領域を深く理解するために必要なのだという形で教えれば学生のモチベーションも上がるというような話をしたが、全ての教員がそのようなことを念頭に置いて授業をされているわけではない。ましてや視野を広げるために必要とはいえ、その後の専門教育に関係しない国語や社会をどのような形で将来につなげて教えるかについては、大学の教養教育も同じかもしれないが、高専教育においても大きな課題であろうと思われる。

グローバル化、国際化という時、海外進出も重要であるが、内なる国際化としての留学生の受け入れも重要な側面である。一見華やかにみえる国際交流も、双方の文化や考え方の違い、あるいは同僚教員の国際交流への取り組みの温度差もあり、国際交流担当者及び管理者にとっては、やり甲斐と共に負担が大きくその役割と成果がより顕在化され、組織的にも社会的にも認知されることが望ましい。

## (2) 国内留学生調査結果

調査結果から言えることは第一に「実験、実習を重視する授業」や「高い専門的技能と専門的知識」、「ものづくりの力」など高専教育の特徴と言える項目については、留学生からの評価が高く、受入についても特に問題とされなかった。従って、高専の学びそのものは十分に海外に通じることが言える。ただし、英語教育コミュニケーション重視受験英語や暗記中心の授業や試験をする必要はないが、現状として留学生の目からは楽しくないように映るのである。

さらに、高専特有の学校生活については改善の余地があると思われる。高専は、高等教育機関に位置づけられ、学習指導要領に沿う必要もない独自の教育を行うことができるが、一方で高校レベルの学生を受け入れ、3年生までは制服の着用もあるというアンビバレントな特徴を有する特殊な教育機関である。この高専教育自体が抱える「ジレンマ」に留学生も戸惑っているように思われる。その非高等教育的な特徴の最たるものが「先輩後輩関係」なのである。

高専が受け入れている留学生は大半が「奨学生」である。それは、回答者の自己認識にも示されるように、それぞれの母国では大変優秀な学生やエリートであることを意味する。従って、異文化である日本の学校生活への適応能力も比較的高いといえる。しかし、それでもホームシックや勉強、友人関係などに悩むこともあるだろう。しかし、受け入れ側がどれほど留学生に対して配慮し、相手国の文化を尊重しているつもりでも、留学生の割合が高専全体の1%に満たないという状況では、「日本人と同等に扱う」ことに主眼が置かれがちになるのではないと思われる。

今後、高専の国際化が進めば、ますます多くの国から私費留学生も含めた多様な背景を有する留学生を受け入れることになる。そのためにも、高専の日本式教育そのものの良さを維持しながらも「世界仕様」に変容すべき点は何かについて、留学生の声を反映させる必要がある。

## (3) モンゴル3高専調査結果

モンゴルの高専教育は、ただ単にシステムだけを導入しようというのではなく、日本の高専と同様に人間性の涵養にも力を入れている。それは、教育科技大高専の育成する技術者像「エンジニアたる前に良き社会人たれ」に象徴される。IETや新モンゴル高専でも「挨拶」等の生徒指導を非常に重視されていた。

この価値観を学生達も十分に認識しており、アンケートでも日本式高専教育において「教員との人間関係」や「友人関係」が「理論研究と実験の組み合わせ」や「実験・実習」以上に評価していた。また、価値観・態度については「勤勉性」、「自主性」、「協調性」を高く評価していた。さらに、こうした人間関係に支えられているからであろう、勉強に関しても課題の多さや日本語の専門用語の難しさに大変な思いをしながらも理論と実践とを学べること、実習を通じて体験的に学べること、将来の職業を見据えた授業であることなどに満足しているようであった。

高専はこれまで理論と実践力の両者を有する即戦力としての人材を輩出することをその最大の特徴としてきた。しかし、日本でも大卒の資格が重視され、短期大学が減少、高専においても専攻科や大学への3年時編入へと進路がシフトしている状況である。伝統的に大卒の資格が重視されるモンゴルにおいては、たとえ法的に高等教育に位置づけられても「準学士」しか出せない点をどう評価されるかも課題である。また、日本の高専は、卒業生に対する企業のニーズは非常に高く、今のところ受け皿には困らない状況にある。一方、モンゴルでは受け皿そのものが発展途上であることは否めない。3高専ともに大学進学への道が開かれてはいるが、即戦力としての機能を発揮できるのかは卒業生への社会的評価に大きく左右されるものと思われる。

日本式高専を伝える側においては、単なる信念の「押しつけ」にならないよう社会文化の違いを踏まえつつ、日本式教育を変容させながら、制度や教育の評価を得ていく必要があると考える。

## (4) マレーシア高専教育実態調査

日本とマレーシアにとって教育交流の成果をあげるためには、相互の産業構造、教育レベル、

経済状況に基づく留学方法と内容の変化が必要である。マレーシアは日本以上に理論重視、実践軽視の傾向が顕著にみられ、高専を含む工業系の高等教育機関としては JABEE 認定しかその学位を認めないとのことであった。マレーシアでは私立高等教育機関として NQF (マレーシア教育の質のフレームワーク) への準拠も必要であり、マレーシアを事例としてみるだけでなく、今後高専が国際展開していく際には、「国際基準」をどのように踏まえて教育プログラムを構築していくか検討が必要となると思われる。35 年以上継続した点はその国際的貢献は評価されるものである。また、教師や元留学生の教師、先輩後輩からの教育指導の蓄積は更に他の教育機関や日本式教育の知見として活用されることが望まれる。

INTEC・KTJ で予備教育を受ける学生は、日本語と格闘し、日本に行くための最終試験に合格するためにハードな毎日を送りながらも、30 人程度の教室の中で、教員や友人達との友好的関係の中で「日本の文化に興味」を持ち、「専門知識を身につけ」将来の「就職に有利」になる日本留学を目指して勉学に励んでいる。周囲に日本人しかいない環境に身を投じることが、日本語・日本文化を修得する早道ではあるが、誰もがそうした環境にすぐに向き合えるだけの精神的な強さを持ち合わせているわけではない。アンケートでは日本の高専で学んでいるマレーシア人留学生は INTEC・KTJ の学生と比べ、「チューター制度」や「寮生活」についてそれほど高い評価はしておらず、「先輩後輩関係」や「時間厳守と効率性」については高専の特徴ではあるが、母国では受け入れられないとする割合が高くなっている。これまで実績の上がった「良い」とされるシステムも運用によっては留学生にとってマイナスの効果を及ぼすことになりかねない。

グローバル時代において、海外の教育機関との短期的な相互交流のみならず長期的な留学生の受け入れは重要な意味を持つ。これから私費留学生の受入を拡大するにあたり、いかにして優秀で意識の高い留学生を受け入れ、留学生の学びと受け入れ側即ち日本側の教育組織の国際意識の醸成とにウインウインの関係を構築できるかが課題となるだろう。

### (5) 国内海外別比較

国内留学生調査をマレーシア(馬)、モンゴル(蒙)と全体とで比較する一方、高専が導入されたモンゴル3高専(以下、3高専)とマレーシアKTJ(予備教育機関)での同様の調査とを対比させながらその特徴を描き出す。

#### 高専教育の特徴への評価からみる理解度

高専教育を高く評価している3つの側面について現在受けている高専での授業内容と水準について尋ねたところ、「とても高く評価する」が全体でも20%と高いが、他国と比べ、馬留学生(24.4%)が高く評価し、蒙留学生は平均より低い(16.5%)であった。一方、KTJ学生(33.8%)、3高専学生(23.8%)もより高く評価している。次に高専教育の特徴として留学生から最も高く評価されている実験・実習の内容水準については、馬・蒙留学生は「とても高く評価」(平均38%に対し共に42%)しており、高専教育への理解が見られる。寮生活についても、留学生全体で、「全く評価しない」「あまり評価しない」が合わせて30%程度と否定的な意見が多い。しかも、高学年ほど否定的(「低評価」3年4年5年:28 25 34%)となる傾向が見られた。

最後に、教授陣の国際性については3高専において特に教授陣の国際性を「好評価」(平均67%に対し80%)する傾向が強い。KTJにおいても86%と高い評価である。一方、日本国内の留学生からは、同程度の高い評価ではあるものの第3学年では77%なのに対し第4、5学年からの評価が若干低下(60%)ぎみである点が解決を要する。

#### 高専で学ぶ価値観への評価と受容度

高専教育の価値観をどの程度評価、受容しているかを見るための質問をした。国内留学生への全体統計からは、責任感を最も評価している。同程度に高く評価されているのは勤勉性と自主性、そして問題解決能力であった。国別に見ると責任感では最も評価が高いのが馬留学生(「とても高く評価」平均43%に対し46%)であり、KTJでも58.8%であったが、蒙留学生や3高専ではやや低い(37-38%)。マレーシアでは高いがモンゴルではそれほどでもないという結果であった。

他の価値観のうち、勤勉性では留学生はほぼ平均値に近く(好評価87%)で、3高専のみ94%と好評価であった。自主性は蒙留学生が平均(87%)で、馬留学生と3高専が比較的高く「好評価」(91%)である。同様に問題解決能力やチャレンジ精神については全体(好評価82%)と比べると馬留学生がやや高く評価(好評価89%)しており、蒙留学生がやや低い(75%)傾向がある。こうした結果について、特にマレーシアは勤勉性を学ぶというルック・イースト政策理念やKTJでの日本留学時に事前の高専への理解が既にできているためとも思われる。留学準備教育は文化的背景、学習方式を踏まえ、留学当初のギャップを好ましいものと捉えることを促進しているといえよう。

高専教育の特徴として、特に創造性とオリジナリティについて教育現場でこれらの価値観が十分伝わっていないことは、カリキュラムや教授法での検討が必要となることを意味している。チャレンジ精神の低傾向や自主学習の精神や自主性を若干全体的に低く評価する学生がおり、課外活動や研究室等で「こつこつとものづくりをする」ことへの意義を感じられていない、言い換えれば研究発展性や飛躍性にあたる部分が、体感されていないことが考えられ、「教えられていないので分からない」という外国人教育特有の葛藤も感じられる。国内高専の異文化への説明力が向上することが期待される。

#### 高専教育の特徴への学生の評価と母国の文化社会での受容

「高専の特徴」とその「母国での受容可能性」を対比させて、最も対照的(両方とも15%以上)

なものを抽出した。国内留学生全体では「特徴」であると認知しているが、母国では受け入れられないとするものは、ロボコン等の課外活動、先輩後輩関係、時間厳守と効率性の3点であった。一方、馬留学生は受け入れにくいものが先輩後輩、時間厳守と効率性の2点であったのに対し、蒙留学生では増加し、集団生活/寮生活、課外活動、実験・実習を重視する授業、先輩後輩、時間厳守、研究室の規則、家族的な学校の雰囲気の7点が受け入れにくいと指摘している。この中でも、実験/実習は80%が特徴としてあげているが32%が受け入れにくいと答えている。更に3高専では課外活動は受け入れられるとする一方で、集団生活/寮生活、実験・実習を重視する授業、先輩後輩、時間厳守、研究室の規則、自主学習の方針、高い専門的スキルと知識、身近な教師との関係、家族的な学校の雰囲気、9点が受け入れにくいとしている。KTJでは多くの項目を特徴と認めているが、先輩後輩、時間厳守だけは社会が受け入れにくいと回答している。

マレーシアでは寮生活をする高校生は多く、実験実習にも慣れがあり個人的、社会的に受け入れやすい傾向があるのに対し、モンゴル特に工学系の分野特有の考え方、産業構造との接続の悪さなど困難な状況が伺われる。ただ一方で、課外活動への理解が向上しているのは3高専の取組が評価されていることを示している。この他、モンゴル共通で家族的学校に違和感があるという点は、現地の教育指導の雰囲気との相違、もしくは家族観や人間関係概念の相違が要因として働いていると考えられる。モンゴル特有の家族観や人間関係を保持しながらそれを高専の家族的風土に移行させる取組が求められよう。

次に、学年別変化について見ていくことで高専への理解度が推測される。全体的な傾向として、「受け入れにくい」と評価された項目でも学年が上がるにつれて割合が低下している項目が見られる点が興味深い。国内調査では、寮・集団生活(12.6%)、課外活動(21.13%)、研究室規則(19.11%)、自主学習等(14.8%)、身近な教師(12.6%)、で理解が進んでいることが期待される。一方、学年間で変動がないのはクラス協働(4.3%)、チームグループ(6.5%)、専門的知識(11.12%)、家族的学校(9.10%)等である。この中で、実験・実習(19.16%)への評価は若干低下気味ながらも高い数値を示していることはより理解を進めるための教育が必要であることを示している。そして評価が低下した先輩後輩(36.52%)と時間厳守(22.27%)からは、高学年にもかかわらず、ますます日本的慣習を受け入れられなくなっている留学生像が浮かび上がる。日本的な良き伝統も海外の年齢や異文化によっては、単に学年だけで単純化するのではなく、役割や機能で対応させることが必要であろう。

#### 日本式高専の受容に伴う個人的な価値観変容への葛藤

高専留学生と3高専で、高専で修得したいものを尋ねると、専門的知識の獲得はもちろんだが、高専の目指すものでもある、自分自身で考えながら「ものづくり」する力(是非身につけたい:72%)、自分の手を動かし実験などから問題の本質をつかむ力(同:69%)、新たなアイデアや解決策を見つけ出す力(同:68%)、他の人と協働する力(同:59%)などの修得に大変高い期待が寄せられていた。これらの項目については蒙留学生でもほぼ同様の結果であったが、馬留学生は他グループよりも高い期待を寄せていた。KTJでも最も高い日本語能力は予備課程ならではの回答であり、それ以外には専門的知識(同:87.5%)、アイデアや解決策を見つけ出す力(同:86.3%)、「ものづくり」する力(同:85%)等は高い意欲を見せている。マレーシアは高専の持ち味と学生のニーズとが特にマッチしていると考えられる。

一方、3高専ではものづくり、実験、アイデアの3つは相対的に低く、専門的知識への期待も比較的低い一方で、工学全般に関する広い知識は他より高い。これは先述した実験等の教育が充実できない状況とアカデミック志向の影響により、モンゴル社会では未だ高専で獲得する専門領域や自分の目的意識が教育目的としては十分形成されていないことが要因と考えられる。自発的で、協働的なものづくりへの項目は様々な知識能力の修得への高い期待の割には、低く評価されがちで、しかもQ10の「母国の受容」でも受け入れにくい項目であった。これらは集団生活やチームワーク、課外活動、クラス協働、研究室、教師関係から醸成されるものであり、価値観のネットと共に教育取組のネットで日本式高専教育は一つのセットとなっているのが実態である。しかし、高専輸出、移植という海外展開においては、現実的にはある程度の機能的解体と代替物との置き換えができないわけではなく、それらは恐らくは当該国の事情によって取捨選択される必要がある。国内高専であれば年月を経て態度価値観への理解や修得が進むだろうが、それでも、意義が伝わりにくい価値や慣習が存在すると同時に、留学生や3高専の学生達は、それらの能力の獲得を教育組織あるいは集団を通してというより、より個人的なものとして考えているようである。

日本式の高専教育は組織的、集団的なスタイルをとりがちである。抵抗、葛藤の強い価値観は長期的に或いは部分的に修正した教育方式が提供されることが望ましい。このための工夫は既に多くの高専の国際展開、国際共同研究においてその素地は出来つつあると思われる。それらを集積して一層新しい教育組織を整えていくことが望ましい。

一方、高いニーズで期待されている知識技能の教育には価値観や社会慣習などにおいてレディネスが整っていることを踏まえながら、教育年数に応じて効率的、段階的に伝えるシステムを構築、提供することで、異なる学習文化でありかつ異なる学習目的を持つ社会や若者に対し理解を得て、評価してもらうことが重要と思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹熊真波	4. 巻 24 vol.1
2. 論文標題 留学生調査にみる高専教育の特徴と国際化への課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本高専学会誌	6. 最初と最後の頁 43-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹熊尚夫	4. 巻 24 vol.2
2. 論文標題 日本式高専の輸出における課題と展望 - 教育的効果に注目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本高専学会誌	6. 最初と最後の頁 35-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹熊真波・白土悟	4. 巻 第4号
2. 論文標題 東アジアの都市化と人口問題－地誌学的視点から－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『筑紫女学園大学 教育実践研究』第4号 筑紫女学園実習支援センター	6. 最初と最後の頁 193-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 竹熊尚夫・竹熊真波
2. 発表標題 高専留学生からみた日本式高専の受容と適応 - アンケート調査結果を元に -
3. 学会等名 日本高専学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 TAKEKUMA hisao
2. 発表標題 RETROSPECT & PROSPECTS OF EDUCATIONAL EXCHANGE BETWEEN MALAYSIA AND JAPAN
3. 学会等名 MALAYSIA JAPAN DISCOURSE PROJECT 2018 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹熊尚夫
2. 発表標題 アジア諸国における高専教育のニーズと課題－マレーシアとモンゴルを事例として－
3. 学会等名 日本高専学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹熊尚夫
2. 発表標題 日本の高等教育改革和国際交流
3. 学会等名 武漢理工大学外国語学院日語系學術講座 (国際研究会) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	竹熊 真波  (TAKEKUMA Manami)  (50253373)	筑紫女学園大学・文学部・教授    (37117)	